江戸人情づくし

お前極楽

榎本滋民

前極楽

江戸人情づくし

榎本滋民

講談社

お前極楽——江戸人情づくし——

著　者　榎本滋民

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一
〒一一二　振替　東京三九三〇
電話　東京（〇三）九四五—一一一（大代表）

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社　国宝社

第一刷発行　昭和五十年四月十六日

©榎本滋民　昭和五十年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。　（文2）

目次

お前極楽……7
ふるさとまとめて……41
だれかさんのお蔵……79
世の中じゃなあ……117
忠治を見た……155
鷹が一羽……191
血みどろ絵金……227

装幀　関野準一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

お前極楽

江戸人情づくし

お前極楽

「なんてったらいいかな」
といって、男が鼻をすすったのは、三度目の晩の、なじみになった床でだった。
かぜをひいているのでもないのに、鼻先と上唇をまとめ上げるように、ちゅんとすする。そして、うす笑いを浮かべた。それまでの荒んだ人態が消えて、急に子どもっぽくなった。
子どもっぽいといっても、あどけないというのではない。いじけた未成年のもっている幼なさなのである。
「女じゃねえように思えたんだ、お前が」
と、男は腹ばいになって、一つ顔をこすった。おきせはうなずいて、
「片輪らしいからおもしろかろうって」
「そうじゃねえ。なんてったらいいかな」
また鼻をすすって、うっすらとはにかむ。
次のことばについて自信がもてないことを前もってことわるような、正しく気のきいたいい回しができないことを恥じるような、それによって相手に迎合している物腰だった。
意識してはいないらしい。癖なのである。無論、具体的に知れはしないが、こうした卑屈な癖

が身につくような過去が、男にあっただろうことは、おきせにも直感できた。
ぐずなりに、ぼんやりなりに、五年の苦界暮らしで養われた勘であろう。
「おれがそれまで知ってた女とは、まるっきり別の人間に見えたのさ。世の中にはこんな女も生きてるのかって、おれはきょとんとしたんだ」
「そんな、あたし、えらい女じゃ……」
「えれえなんぞといってるんじゃねえったら。ただ、ひどく変わった感じがしたのよ」
「このぐずでぼんやりで、青びょうたんの女が……」
男にそれほどの印象を与えたとは不思議である。
あの晩——。
卯の花腐しのなまあたたかい雨が、べしょべしょと降りつづいて、もう三日目だった。
「人足殺すにゃ刃物はいらぬ、雨の三日も降ればよい」
で、さすがに賢張りのお台場人足も、ほとんどこない。
公認の遊里である新吉原とちがって、品川・板橋・内藤新宿・千住の四宿は、飯盛り旅籠の名目で営業し、抱え女は飯盛り女と唱えているが、いうまでもなく女郎で、一軒二人の制限も、品川は旅人も多く宿役も重いからと、一軒平均五人強までにゆるめられている。
もっとも、蓬莱屋のような小見世に六人は多すぎるから、公称の飯盛り女は三人とし、あとは下女で、連子窓に張り見世をするのは飯盛り女に限り、下女は陰見世で奥に控えるというたてまえなのだが、それでさえ万一の宿改めなどの際のいい抜けに過ぎない。下女が見世の掃除をするといったたてまえで、姿形も公称の飯盛り女の三人と変わりなく、やはり張り見世をしているの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

である。

その張り見世も、あまりの時化にする気力が失せ、都合五人とも連子窓の中でばかっ花札を引き、ふだんなら督励をする遣り手のおつわも若い者の太吉も、あきらめてそれに加わり、おきせだけが軒下の柱にもたれて、ぼんやりと雨足を見ていた晩だった。

向こう三軒も両隣りも、灯の色を濡れた道にむなしく放っている。どこかの座敷から聞こえてくる騒ぎ唄も、さあさ浮いた浮いたとやけに高っ調子なのが、かえって白々しい。

こんな晩に、傘もささずに通りかかる男を呼び止めない者は、宿場にはまずいないだろう。袖を引くのは、軒先に出ている妓夫の若い者の仕事だが、

「ちょいとちょいと、様子のいい男。濡れるんならあたしも濡れさせとくれ」

「そう前が突っぱらかっちゃ、歩きにくかろうに」

「素通りはないだろう。上がってお行きな」

「先を急ぐような顔をして。ほかに用があるはずはないじゃないか」

「この先は町並もないんだよ。うふん。知ってるくせに」

などと女郎も声をかける。

連子のあいだから煙管の雁首を出して、男の袖にからませる。軒先に出ていれば、いきなり男の前をにぎってしまう。そのくらいのことをしなければ、送り茶屋も通さない小見世は、客がとれるものではない。

だが、おきせはうつろな目を、男に向けただけだった。どだい、こんなふうだから、売れないのである。

〈でも、いいんだ、それで〉
と、おきせは思っている。労咳で、いつも微熱がある。その晩はことに億劫だった。
やたら縞の単衣の尻をはしょり、瓶のぞきの手ぬぐいをすっとこかぶりにした男が、麻裏草履をびちゃびちゃさせて通り過ぎたが、ふと立ち止まってふり向き、怒ったように聞いた。
「お前……なにをしてるんだ」
「なにって……その……張り見世を……」
「張り見世を？　なら、どうして声をかけねえ。どうして腕をつかまねえんだよ」
「どうしてって……別にあの……」
「女郎のくせに、妙なあまだな」
「すみません」
と、おきせは頭を下げた。そんなつもりでもないのに、つい反射的にわびごとが口から出てしまう。
「あ、あやまることはねえけれど」
男はちょっとどもって、まじまじとおきせを見てから、
「じゃ、ま、上がるか」
と、手ぬぐいをとった。
太吉とおつわは花札をほうり出して男を請じ入れたが、女郎たちは食われた顔で見送った。一番売れない陰気なおきせが、軒先でなにか二こと三こと話しただけで、客をくわえこんでしまったのが、いまいましいやらばかばかしいやらで、

「雨が降る道理だね」
「逆だよ。気ちがい雨が降りつづきゃあがるから、こんな珍なことも起きるのさ」
いっせいに大声で伸びをした。

男は煮売り屋で飲んできた酒が、一時に発したのだろう、坐るか坐らないかのうちに、おきせを押し倒し、そのまま床入りとなった。
ほかに客はなかったから、廻しをとる必要もなく、本部屋での抱きっきりができたのだが、男はほとんど無言でおきせをむさぼると、泥のように眠りこけ、雨上がりの道を帰って行った。あぶれないで助かりはしたが、心にしみるような初会ではない。
しかし、ふたたび端午の節句の前夜にきた男の、
「明日は物日で金がかかるから、けちをしてな」
ということばに、おきせはおやと思った。
品川の宿場は歩行新宿・北本宿・南本宿の三区域から成っている。
北本宿と南本宿とのあいだに目黒川が流れ、中の橋という橋がかかり、南本宿は橋向こうと呼ばれるが、これは蔑称である。総数約九十軒の飯盛り旅籠のうち、大見世は歩行新宿・北本宿に固まり、南本宿は小見世が多いからだった。
蓬莱屋はその橋向こうも宿はずれに近い小見世なので、大見世のように、送り茶屋を通さなければ上がれないこともないし、初会だ裏だなじみだという遊びの段どりも、やかましくはない。
万事が安直で、現に男は、初会でおきせの体を開いている。

しかし、節句や祝祭日のいわゆる物日に登楼すると、やはり揚げ代はかさむし、祝儀もはずまなければならない。それには自分は非力なので、物日を避けて前夜にきたのだという。すると、男はちゃんと裏を返すつもりできてくれたのだろうか。

確かめたかったが、遠慮した。

「ばか。たまたま上がったら、お前だったというだけのことよ。うぬぼれるんじゃねえ」

と、叱られるにきまっている。

その晩は廻し部屋だったし、男も夜中に帰って行った。別れぎわに名前を聞いたら、

「権兵衛、じゃねえ、権十さ」

背中で答えた。どうせ本名ではないだろうが、突っこんで聞く気もない。

こんな程度だったので、十日あまりたっての三度目の訪れは、

「へええ……」

と、朋輩女郎たちは露骨に呆れてみせたが、おきせ自身でさえ、少なからず驚いたのである。

しかし、とにもかくにも、なじみになってくれたことはありがたく、おきせは礼をいい、ひとまず果てた男が彼女の上から降りたとき、初会の晩に気軽く上がってくれたわけを尋ねたのに対して答えたのが、

「なんてったらいいかな」

なのだった。

「変わってるじゃねえか。声もかけねえ、腕もつかまねえとはさ。どうしてなんだ。え?」

と、改めて、逆に男が聞いたものである。

「あたしみたいなつまらない女がお止めしちゃ、お前はん、御迷惑だろうと思ったんで……」
おきせは軽くうそをついた。
「ふうん……」
と、目の色が深くなって、しばらく男は黙った。やがて、かすれた声でいった。
「話してみねえか、身の上を」
「まさか……」
「いや、女郎の身の上ばなしをまともに聞くなんざ、痴呆の骨頂だぐれえ、おれだって知ってるさ。だが、お前のだけは別な気がするんだ」
腹ばいになった男に、煙草を吸いつけてやりながら、おきせは今ついたうそが、うそでなかったように思えてきた。すると、男の目の深い色に、自分の胸もじわじわと染まりはじめるのを、覚えるのだった。

おきせは牛込の石工の娘である。
陰気な性分と青ざめた肌色とを、父親から受けついだ。父親は酒も飲まず、女にも勝負ごとにも興味がないようで、黙々と背中を丸め、縦割れしていびつな爪のついた、はれたように肉厚な指で、石を刻みつづけた。合の手にごほごほと、力のない咳をする。
「全くなにがおもしろいんだか」
と、母親はいつもののしっていた。
「木仏金仏石仏っていうけど、手前まで石みたいにしてなくったってよさそうなもんだ」

赤ら顔の母親は派手な気性で、
「石屋なんぞにくるんじゃなかったよ。とんだ音ちがいだったねえ」
と、こぼすのもしきりだった。石屋へではなく、医者へとつげば楽ができて、陽気に暮らせただろうというのである。
そのついでとでもいうように、
「お前はつまらない女だ」
ぐずでぼんやりでとくり返す。陰気で不器量だから、芸者にしてかせがせることもできないのが、腹立たしいのだろう。
おきせは自分をつまらない女だと思いこみ、人を不愉快にさせるのではないかと、おびえながら育った。自分が悪くもないのにすぐあやまるのが、習いになった。
父親の留守に、石塔を催促にきた坊主が、母親を抱いているのを、おきせは目撃した。母親ははじめてではなく、寺へ行っては抱かれているらしく、なれた声を上げて、太った体を波打たせていた。
おきせは黙っていたが、父親はやがてそれと察して、やけ酒をあおり出し、石材を運ぶ腰をふらつかせて、指をつめる大けがをしてしまった。
「踏んだり蹴ったりだねえ」
と、母親はさんざんこぼした末、娘を女衒に渡して、内藤新宿の飯盛り旅籠に三年の年期、十五両の身の代金で売った。
おきせは女衒に新鉢を割られ、遣り手に床あしらいをしこまれたが、なかなか売れず、よく暗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.